

学校を
創る

子どもたちの成長を考え、挑戦する 教職員の育成を目指して



山武市立大平小学校長 かわの かよこ
川野佳代子

1 はじめに

職場の若返りの中でも学校としての組織力の維持向上、学校への信頼は堅守しなければならない。若い教職員の指導力の育成は喫緊の課題であり、自分自身もリーダーとしての力を備えないことには、組織の成長はないと考えている。「踏襲を良しとせず」を掲げ、「新しいことへの挑戦」、「失敗を恐れない取組」を共通理解し教育活動を実践している。

2 大平小学校について

創立129年目を迎える歴史と伝統のある学校である。保護者は学校運営に対して協力的であり、祖父母の代から地域の応援団として、関心と愛情も持って関わってくれる。「大平小学校にいることの幸福感を味わわせることができる指導をする」を経営方針の柱に、一人一人の教職員が役割を認識し、子どもたちのために何ができるかを常に考え実践することを大事にして教育活動を展開している。

3 教職員の育成を目指した実践の概要

(1) 目指す教職員集団

学ぶことの楽しさを伝えられる職員集団であること、そのために常に研修や研究を通して自己改革を図る職員集団であり、子どもを鍛えていくために、あらゆる教育資源を活用して教育実践をする職員集団となることを目指している。

(2) 校長の役割

①学校の実態を職員全体で、次の三つの視点から共通認識する。

(ア)課題の明確化

(イ)良さの確認

(ウ)到達目標の提示

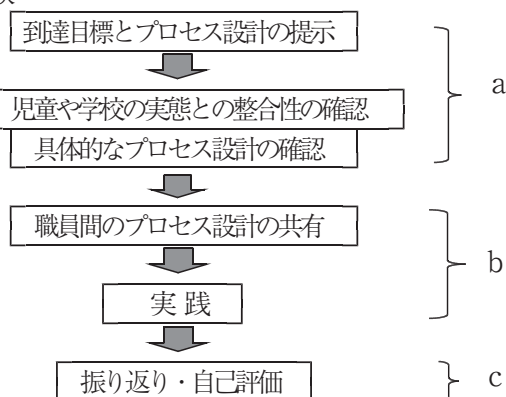
②目標申告の面談を活用して、職員個々の役割と目標を明確にするために以下のような取組をした。

(ア)教職員個々への働きかけ

登下校から学校生活に及ぶ生活規律については生徒指導担当へ、読む力の育成については研究主任や国語、図書担当へ等、児童に必要なことや担当教員ができることを、助言したり確認したりして、プロセス設計の元を確立させた。

(イ)教職員個々のミッションの具体化

面談



a 何をするのか具体的な言葉に落とし込む。自ら決めた仕事で力をつけていけるように指導助言に時間をかける。

b 実践の相互評価と次のステップを相談して、自覚を高め目標を設定する。

c 成果と成長を確認し次年度のビジョンを描く。

(3)教職員の実践から

教職員個々への働きかけを具体的にした結果が授業改善や新しい活動、教職員の意識改革につながった。以下にその一部を示す。

①授業改善の取組

- ・3年生社会科「農家の仕事」でジグソー法を使って授業を行った。元のグループに戻すと、友達の発表を真剣に聞き合う姿が見られた（写真1）。

- ・総合的な学習の時間では、児童に身に付けさせたい力を学年ごとに明らかにして、大平小



写真1 3年生社会科発表の様子

- ・オリジナルの総合的な学習の時間を始めた。
- ・子どもの学ぶ意欲を維持するために、学習が日常の生活のどの場面に生かされているか、関連性を意識した教材研究、授業展開を考えるようになった。
- ・校外学習を学習内容にどう結び付けて生かすのかを考えるようになった。新聞やまとめの発表の形骸化を防ぐ。
- ・悩んで、考えて、できた！という体験をたくさんさせたい。学習の理解が早い子どもには達成感を感じられる問題を常に用意して授業に臨んでいる。
- ・読書が好きな子には本をすすめる時間をつくったりニュースをよく見ている子にはニュースについて話す時間をつくっている。
- ・ICT機器を活用した授業モデルの作成にチャレンジしている。
- ・保護者、職員も含め、全校漢字検定を行う。
- ・体力、調整力を向上させるために、補助運動や様々な走るメニューを工夫して、毎時間計画的に行うようにしている。

②新しく始めた活動・行事等

- ・体育委員会の活動方針を、子どもたちが主体的に立案し実行するようにした。

- ・子どもと創る卒業式を実践した。
- ・縦割り清掃を計画し実践した。
- ・ユニバーサルデザインの教室環境を提案した。
- ・虫菌治癒率100%運動を始めた。
- ・靴箱の整理整頓のアイデア運動を始めた（写真2）。



写真2 靴箱整頓アイデア運動

③教職員アンケートから

校長面談を経て、教育実践の意識が変化したか、実践内容を変更したか、分掌で新しい取組をしたかという問いに、全ての職員が「ある」と回答した。大平小学校をつくっていく一員として、どんな教師になりたいかの問いには、「こうしたいんだと積極的に発言、行動できる教師になる」「子どもの長所をぐんと引き伸ばせる教師になる」「授業で絶対に手抜きをしない」等、意欲のある意見が書かれていた。

4 おわりに

昨年4月、「話の聞ける子どもたちにする」を掲げて始まった学校経営。1年を過ぎて、ほぼ目標達成に近づいている。学校評価では、児童の自己肯定感、授業の評価、先生への評価が全ての項目でプラス評価となった。

職員は、向上心が高く、児童の学びを生かすことを大事に教育活動が展開できる。靴箱の整頓運動は、先輩教師から後輩へとバトンタッチし、また新たな視点でアプローチをしている。私自身に、どんな質問にも相談にも的確にかつ迅速に対応しなければという意欲を持たせてくれる職員集団である。教師の力量以上の教育はできないのだと肝に銘じ、校長としてリーダーシップを発揮していきたい。

学校を
支える

地域に支えられ、地域を支える学校

～学校支援地域本部との連携を推進するために～

流山市立北部中学校教頭

ひろながしゅうじろう
弘永修二郎



1 はじめに

本校は、市内で最も古い中学校の一つである。本年度は創立71年目を迎えた。全校生徒493名で通常級14学級、特別支援学級1学級の中規模の学校である。

市内には、小学校16校、中学校9校があり、平成17年に開通したつくばエクスプレス沿線では、子育て世代の人口増加により、平成27年度に小中併設のおおたかの森小中学校が開校し、更に平成33年4月には、新たな小学校の開校が予定されている。そのような市内の状況下であるが、本校は児童生徒数の急激な変化はなく比較的安定した地域にある。

2 学校支援地域本部との連携

(1)北部中学校区学校支援地域本部の概要

本校の地域本部は、国の新規事業として始まり、平成20年度から地域と連携した様々な活動を行っている。10年目を迎えた現在ではコーディネーター2名が中心となり、約130名のサポーターに支えられ、安定した活動と「地域とともに歩む学校づくり」の実現に向けて着実に活動を進めている。また、平成26年度には本事業に対し文部科学大臣表彰を受けている。

(2)具体的な取組

地域本部において、コーディネーターとの調整役として活動するのが教頭の役割である。この役割を丁寧に実践することが、地域の教育力を学校に導き、生徒の様々な資質・能力の育成に役立つと考えている。

地域の教育力を活用した主な内容は、以

下の通りである。その具体的な取組について述べる。

①学力の向上（主な取組）

(ア)算数・数学サポート

地域で算数・数学を教えられる高齢者の方々にサポーターになっていただき、小学校では15分間の朝自習の時間に丸付けをして、間違ったところはその場で簡単にやり方を教えるなどして基礎基本の定着を図っている。また、中学校では、月2回程度部活動を行わない日の放課後に学年別の数学補習を行っており、基礎基本が定着しない生徒が数学科の教員とサポーターにほぼマンツーマンで教えていただいている。授業だけではなかなか補いきれない部分を少人数で丁寧に教えて下さるので生徒たちにとっても有意義な時間となっている。



写真1 数学サポート

(イ)英語検定二次面接練習

英語検定3級以上を受検する生徒にとって、二次の面接は初めての経験であり、とても緊張する試験である。



写真2 英検サポート

本校では、地域の中で外資系の会社
に勤務した経験がある方や市の国際交流協会で活動されていたサポーターなどが面接官役になり試験本番を想定した模擬面接を行ってくれている。日常的に接している教

員ではない方に面接官をやっていただくことで適度な緊張感の中で、二次対策ができている。

(ウ)様々な授業サポート

キャリア教育における「職業人講和」の講師役など、授業の中でより多くの指導者がいた方が生徒にとって学習効果が高い内容についてサポートしていただいている。



写真3 書道サポート

- ・書道（書道の師範の資格のある方）
- ・家庭科（保護者によるミシン）

②読書・図書室の充実

地域の読書好きな方々による図書室の整備等が行われている。季節ごとの装飾や課題図書・おすすめ本の紹介、図書のバーコード化作業など生徒たちが図書室に足を運びたくなるような環境づくりをしていただいているので、昼休みの図書室はいつも生徒たちで賑わっている。

③キャリア教育の推進

1年生で行っている「職業人講話」、2年生で行っている「職業体験」などにおいて、それぞれの学年の要望に応じて、地域の中で適切な人材を紹介していただいたり、各事業所との連絡をとっていただいたりなど、地域の教育力を生かした学習のサポートを行っている。

④学校環境の整備

植木の剪定や草取り、プランター等への花の植替えなど環境整備のサポートをしていただいている。また、秋には生徒・教員とともに落ち葉掃きなどもボランティアで行っている。共に作業を行う中で自然と会話が生まれコミュニケーションが深まっていると感じている。

⑤その他

体育祭の駐輪場整理や行事の立て看板作成、賞状書き等学校のニーズに応じて様々

なサポートをしていただいている。

(3)成果と課題

学校支援地域本部が立ち上がり、年月が経過する中で多くの成果が見られる。最も大きな成果の一つは、地域人材が学校に関わる機会が非常に増えたということである。

これは校長の経営方針の一つである「保護者や地域の方に信頼される、開かれた学校をつくる」ために、地域教育力を積極的に活用していくことにつながる。そのことが生徒の学力向上や豊かな人間関係づくり、社会性の育成にも役立つものである。

今後の課題としては、コーディネーターとのコミュニケーションを常に密にしながらその時々学校のニーズに応じたサポーター活動の在り方について探求していくことだと考えている。学校と地域とのパイプ役である教頭としては、最も大切であり、苦勞する点でもある。しかし、私の場合は、以前本校に教諭として勤務していたこともあり、コーディネーターとは雑談を含め、様々な話をすることができるので、たいへん恵まれている。

この利点を生かし、コーディネーターと情報交換する中で、地域の方のサポートを受けた生徒たちが今度は地域に貢献できるような活動の在り方を探っていきたい。

3 おわりに

本校の学校教育目標は「心豊かで、活力ある生徒の育成」である。この目標の具現化のために地域教育力を活用することは非常に効果的な取組である。教頭として、その橋渡し役を担うことは重要であると認識している。これからも校長の指導の下、教職員、地域に支えられながら、子どもたちのために努力していきたいと考える。

学校を動かす

教務主任としてできること

長南町立長南中学校教諭

みつもと まさる
三ツ本 勝



1 はじめに

昨年度より本校に赴任し教務主任として校務に当たっている。教育計画の立案その他の教務に関する事項について連絡調整及び指導・助言をすることが任となっているが、校長をはじめ職員の支えや協力が無ければ、ここまでの職務を果たすことができなかったことと思う。

2 小中一貫型の学校として

平成29年度より、町内4校の小学校が1校に統合された。それに伴い、本校に併設して小学校用校舎（普通教室）を増築し、施設一体型の小中一貫校となった。特別教室（体育館・グラウンド・理科室・家庭科室・木工室・美術室・音楽室）については、共有して学習活動を行っている。

3 より良い小中連携のための相互理解

教育課程が各々で違いがあるため、各種の学校行事や、特別教室使用状況等を小学校と連絡を取り合い、確認・調整を行いながら、教務として運営を行っている。小学校と中学校では、日課時刻の違いもあるため、授業編成も含めて小学校と協議を行い、職員に周知を図っている。必要なことは、児童・生徒及び職員の相互理解である。行事や授業において急を要する時間変更や特別教室の使用変更などの支障が出てくるが、お互いの状況を理解し合い、調整し合うことが大切になってくる。小・中相互理解や連携を100%図っていくには時間的にも状況的にも困難な状況ではあるが、そうした中でも特別教室を共有している理科や技術・家庭科、保健体育科等では小中職員

同士で連絡を取り合い、指導方法の意見交換や学習支援を行うなど相互理解・連携が深まってきている。児童生徒の触れ合う場面としても日常の校舎内を移動時はもちろん、同じ時間に清掃を行い、避難訓練や芸術鑑賞会なども合同で行っている。



小・中授業交流の風景（合唱）

4 教務主任としてできること

教務主任として学校組織を滞りなく円滑に動かすためには、しっかりと「事前の相談」と「お知らせ」が大切だと思っている。

先を見通して情報を収集し、関係する生徒や職員に説明・確認を行い、早い段階で全体で意思疎通ができるように努めている。しかしながら、教務主任としてできることは限られている。より良い学校となるように学校を動かしているのは、提案した計画や流れを理解し、円滑に進められるように生徒を指導している職員一人一人の力である。

本校の学校教育目標である「変化に対応でき、確かな学力を身につけた、健康で心豊かな生徒の育成」を目指して、これからも学校運営の一助となるように職員と共に頑張っていきたい。

組織的な研修体制の確立を通じた校内研修の充実 ～授業改善を目指して～

成田市立遠山中学校教諭

くりはら
栗原

なおゆき
直行



1 はじめに

成田市立遠山中学校は成田国際空港の近隣にある生徒数300人超の中規模校である。

本校の特徴に学力、家庭環境、職員の年齢層等の「二極化」がある。研究主題は『『確かな学力』の向上～学びあい活動の充実を通して～』である。学力向上を目的とした校内研修は、本年度で3年目の取組となる。

2 具体的な取組と成果

(1) 研修体制の整備

「校内研修は全職員が組織で取り組むべき」と管理職より助言があり、研修部を立ち上げた。管理職・教務主任・教科主任・研究主任で構成される学力向上推進委員会を毎月行い、各教科の実践報告や全教科の共通実践事項を共有した。また教科会の確実な運営のため、教務主任と連携し、教科スタッフ制を導入し、毎週教科会を実施したことで、教科内での共通理解ができてきた。また学習指導部が学習委員会と連動し、家庭学習の習慣化やテスト計画表の改善等を行い、学力向上に対する意識は高まっている。また、「授業スタンダード（授業の約束）」、「授業の心得（学び合いの約束）」を作成し、共通実践を図っている。ICT整備は、事務職員と連携し、全教室のLAN整備を行い、教室でインターネットと校内共有フォルダが使用可能になり、アクセスポイントをLANにつなぐことでタブレット6台も活用できるようになった。50型TVの併用も授業で提示する資料が見やすくなり大きな効果があった。実物投

影機3台、外付け電子黒板1台を購入し、ICT教育機器の充実もできた。

(2) 職員の意識改善

研修成果発表の場として、研究授業と相互授業参観を計画的に行った。研究授業は1学期に全教科、2学期に全領域で毎年行っている。相互授業参観は、参観ワークシートを教務主任が作成し、教頭が週報を元に授業参観を促している。感想を共有できるノートも作成し、全職員で振り返りを行い授業改善に努めた。また積極的に公開研究会等に参加し、意識改革や授業力向上を図った。今年度は、道徳主任を中心に「考えて議論する道徳」をテーマに校内研修会を計4回行い、改善の視点を共有し、指導案検討等を実施した。

3 成果と課題

生徒による授業アンケートの実施により研究の成果を確認した。「話し合い活動の充実」について昨年度は、全教科で数値が向上した反面、「授業の充実感」に課題が残った。全国学力・学習状況調査や成田市学力テストでは、平均点が向上している。長欠生徒も昨年度は減少した。今後は、生徒の実態にあった研修が必要であり、またICT機器を授業で更に活用することや、知識の定着度における二極化解消が課題である。限られた中でカリキュラムマネジメントを意識した企画運営が今後求められる。教職員が感性を磨き深く考え、内容の精選や学び方に関連した教育実践が重要である。

授業を
創る

視点を変えて、変化を生み出す

鎌ヶ谷市立第四中学校主幹教諭 そうま 相馬 たかひろ 高広



1 はじめに

年度当初、私は目標を立てた。「今年度は授業の中にたくさんの「変化」を作っていこう」と。これには理由がある。今年度は一つの学年を二人で担当することになり、もう一人の担当は、私の教え子なのである。つまり、自分の教え子が同僚となり、更に同じ学年を担当する「コンビ」になった。過去の自分に捉われず、大学を卒業したばかりのフレッシュな感覚を共有させてもらおうと心に決めたのである。

学習指導要領の完全実施に向け、「主体的・対話的で深い学び」の観点から授業改善が求められる。私は、日々の「小さな変化」はやがて「大きな成果」へと変わっていくと考え、授業改善に向け、まずは「視点を変える」ことで変化を生むことを心掛けている。今回は、日々の授業改善に取り組んでいる中の自分自身の「小さな変化」の実践を御紹介したい。

2 ペアワークの活用

一斉授業では、どうしても一対多数の構図になり、一人一人が十分思考せずに、先に進んでしまうことがある。そこで、私の授業では、ペアワークを多く取り入れている。

(1)発表前に

教師が生徒に何か質問をした際、発表の前に、まずペアで自分たちの考えをシェアさせる。毎回繰り返し行い、「誰かが答えてくれる」から「全員が考え、意欲的に参加する」ようにしている。

(2)教科書本文の導入の後に

教科書本文を意味のまとまりごとに区切った英文とその日本語訳がそれぞれ左右で対応しているプリントを作成し、これを活用

して、ペアワークで相互チェックを行う。

この活動の目的は、生徒自身でどこがわからないのかを明確にし、それを解決していく手順を体得することにある。活動のバリエーションは以下のとおりである。

- ①英文を正しく音読する
- ②英文を見て日本語訳を言う
- ③日本語訳をみて英文を言う

3 「気付き」の場面をつくる

(1)音読練習

音読の際、教師の後に続けて読むだけでは、本当に自分で正確に読めているのかわからない。そこで、次のような流れで行う。

まず自力で音読をする。次にCDを聞く。これを数回繰り返す。すると生徒は、自分が発音できなかったところを注意して聞こうとする。その際の、発音に集中してリスニングをする生徒の姿は、真剣そのものである。

(2)まとめ作成

黒板に文法の説明等を書く。それを、生徒がノートに写す。しかし、そのノートを活用することが少ないと感じていた。

そこで、私が初めに板書をせず、生徒はペアで文法の説明等のまとめをノートに書く活動を行う。ペアで行うことで、何をノートに書いておくべきかを議論したり、「気付き」を共有したりしている。

また、自分でまとめたものを持ち込み可とした文法確認テストを実施し、ノートを活用する意識を持たせている。

4 曖昧さに慣れる

英文を読む際に、生徒は意味のわからない単語や難しい構造の文に遭遇するとその

先を読む意欲が急激に低下してしまう。入試や実社会では、自分が知らない語彙を含む、いわゆる長文を読まなければならない。

そこで、「自力で reading」という活動を最初に行う。その名のとおり、意味を調べたり、聞いたりせず、自分の今の力を使って、とにかく読む。そこからわかったことを簡潔に記録し、その後ペアで共有するというものである。全ての単語や文の意味が完璧にわからなくても、相手（英文の筆者）が何を伝えようとしているのかを感じ取るためのトレーニングである。この曖昧な状況に慣れることは、外国語の学習において大切な力であると考え、この活動を行っている。

5 正解のない問いに挑戦

教科書の各セクションに“Basic Dialog”という学習する文法事項を含んだ4行の会話文がある。

A: The phone is ringing. Can you answer it?

B: Sorry, I can't. I'm cooking now.

A: OK. I will answer it.

B: Thanks.

『Sunshine English Course 2 P20 (開隆堂出版)』

日本語訳をペアで確認し、以前は、その後すぐに音読練習、暗唱・暗写の活動へ移っていた。しかし、会話のイメージがつかみにくく、無味乾燥な活動に終始してしまうことが課題であった。そこで、音読練習の後に「隠れた情報をキャッチ！」という新たな活動を取り入れた。

これは、会話文からイメージを広げる活動である。例えば、どこで話している会話か、登場人物二人の関係は、登場人物はどのような性格かなど、何度も読み込んで、自分なりの根拠を持って推測する。もちろんこの活動には正解はない。生徒一人一人が読み取った情報をもとに、自由にイメージすることに狙いがある。

この活動をペアで行い、お互いの考えから、どんどんイメージを膨らませ、生徒は自分たちで様々に考え始めるのである。

上記の会話文では、「電話がなかったり、

料理をしたりしているから、会話の場所は自宅であり、二人は夫婦である」とか「最初から自分で電話に出ようとしめない怠惰な人である」などと、自分なりの根拠を持って場面や状況を推測するのである。初めのうちは、なかなか多くのアイデアが出てこなかったが、徐々に増えてくるようになった。この活動で、生徒は何度も読み返すことにより、覚えるというストレスを感じることなく、自然と暗記している生徒が増えた。

6 テストの振り返りの活用

定期テストが終わるたびに、「振り返りシート」を活用した振り返りを行う。このシートでは、生徒が観点別の達成率をグラフに示し、授業の取組に関する項目を3段階で評価する。これにより、生徒自身が努力が足りなかったものは何であったのかに気付いたり、良かった取組や「もし2週間前に戻れるとしたらどうする」などの視点で気付きを深めている。実際、生徒は一生懸命に分析し、シートいっぱいを書く。

しかし、そこで終わらせてしまっただけでは、意味がない。その振り返りを次にどう生かすかが大切である。

そこで、生徒が書いた「振り返りシート」を次の定期テストの学習計画表を作成するタイミングで活用し、今回取り組むべきことを学習計画表に具体的に記載するようにしている。

7 おわりに

学習指導要領の改訂に伴い、子どもたちの学びが大きく変わると言われている。それは、私たちの授業も大きく変わるということである。そのために、日々の実践において、目の前の生徒たちと向き合い、一つ一つの活動に意味をもたせ、授業の「小さな変化」を生み出すことで、大きな成果へとつなげていきたい。自分自身の視点を変え、常によりよい授業を目指して変化し続ける教師でありたい。

子どもを知る

私の一年目

県立我孫子特別支援学校清新分校教諭

すずきりんたろう
鈴木竜太郎



「浮いている」これが私の一年目のスタートの正直な気持ちである。縁があつて来たのだから頑張ろうと思ったものの、学生の時からずっと生物と戯れていた人間が特別支援学校に勤務するのだ。勤まるだろうか？と不安に思うことこの上ない。

本校は特別支援学校であるが、職業コースを置き、教科指導の時間がある。それは理科主任を任せられた私にとって楽しみでもあり、不安でもある時間だ。実際に教壇に立ってみると、私が想像する以上に生徒はいろいろなことに興味があつた。ただ、断片的にしか知らなかったり、体験していなかったりするだけなのだ。楽しみにしている生徒のためにも、理科室も実験器具もないところで日々苦心しながら教材研究に明け暮れた。そんな中で、有難かつたことは初任者指導の先生の存在である。一緒に授業の内容を考えてくださったり、予備実験や教材の準備を行ったりすることは元より、学級経営やコース実習、生徒のことまで気に掛けてくださった。一年間どうにか続いたのは、初任者指導の先生のおかげであるといっても過言ではない。

そんな一年目がどうにか過ぎ去った。諸先輩方や初任者研修のおかげで多少は特別支援学校の先生らしくなってきた気もする。とは言っても、学級経営や生徒指導などまだ分からないことばかり、理科の授業も勉強不足な部分が多い。まだまだ「浮いている」感は否めないが、特別支援教育も理科教育もできる教員を目指して今後も努力を続けたい。

子どもを知る

ゴール（目標）を見据えて

我孫子市立布佐中学校教諭

あらい はるみ
荒井 晴美



今年度から初めて特別支援学級の担任となった私は、子どもたちとの出会いに希望と期待を寄せる一方で、子どもたちとの関わり方に大きな不安と戸惑いを感じていた。学級開きがあり、活動が始まると不安が的中し、授業中の私語や離席など、集中しない状態が続いてしまった。

私は悩み、眠れない日々が続いた。どうしたら活動に集中させることができるのだろうか。生徒の課題と向き合い、個々の生徒を理解するために、生徒の立場になって様々な学習の手立てを考えた結果、学習課題の設定を見直してみることにした。そうすると、普段は5分ほど経つと飽きてしまうような状態だったが、その日は黙々と計算問題を解き、15分ほど課題に集中して取り組むことができた。課題設定を易しくしたことで、「できた」という成功体験が学習に向かう意欲につながった。また、少しでも話を聞く力を身に付けさせるために、話し合いのルールをみんなで決めた。挙手をして発表すること、発表者の方を見て目で聴くことを支援員さんや授業で関わる先生方と連携して指導し、それができたときは褒めるようにした。それからルールに少しずつ条件を加えていくことで、「聞く」そして「聴く」姿勢が身に付いてきた。

特別支援教育の最終的な目標の一つに「社会的自立」が掲げられる。これから生きていくうえで、子どもたちは様々な壁にぶつかる。その壁を自分の力で乗り越えていくために、生徒一人一人が「できる」ことを増やしていくことが「自立」につながるのではないだろうか。今、目の前にいる子どもたちが社会に出たときに、働くことにやりがいを感じ、豊かな人生を送っていくために、これからも生徒一人一人と向き合い、個性を伸ばす丁寧な指導を心掛けていきたい。